

R 音転換再考

松 瀬 憲 司

Rhotacism Reconsidered

Kenji MATSUSE

(Received September 1, 2000)

“Rhotacism” is, simply speaking, a sound change where /z/ alternates with /r/. This occurred at both medial and final positions of some words in the pre-historical times of the English language. English belongs to the Germanic (Gmc.) languages which were derived from the Proto-Indo-European (PIE), the ancestral language for almost all European languages and also for several Middle-Eastern and Indian languages. The Gmc. languages are clearly distinguished from the PIE in terms of the first Germanic Consonant Shift well known as Grimm’s law [plus Verner’s law.] In them except Gothic (an East Germanic language) /z/, one of the newly obtained consonants, was further shifted to /r/. This kind of sound shift is intensively observed in Old Norse (ON) which is the language of the Vikings who came from Scandinavian and Jutland peninsulas, and settled in Northumbria, Mercia, and East Anglia, the northern and eastern areas of England.

The Standard English, which was made from the London vernacular based on the Anglian dialect of English, not from so-called Old English, the language of Kingdom of Wessex located in the south-western England, can be said to be very much influenced by this North Germanic language in that the rhotacized -r ending of ON has created the corresponding -s ending (pronounced as /z/) in it.

As for the pronunciation of /r/ itself, especially in the postvocalic environment, /r/ has lost its rhoticity in the Standard English in England. This is because that r-lessness (no rhoticity) for the postvocalic /r/ has gained “prestige” in the standard form. It is also conceivable that aspiration for this prestige accounts for the adoption of the -s ending (northern form) in the standard form rather than the -th (southern) one.

Key words : rhotacism, Verner’s law, Old Norse, rhoticity, prestige

1 はじめに

現代英語 (Present-Day English : 以下 PDE と略記) の /r/ は, 他のヨーロッパ言語の「r 音」に比べてかなり特殊な音であり, 調音音声学的には「後部歯茎接近音 (post-alveolar approximant)」と呼ばれている (ローチ, 1996:61).¹⁾ ところが, 古英語 (Old English : OE) における /r/ は, スペイン語やロシア語に見られるような「顫動音 (trill)」もしくは「反転音 (retroflex)」であったらしい (近藤・藤原, 1993:23). このように, 英語の /r/ の発達自体も実に興味深い事項なのだが, 本稿で取り上げる「r 音」への転換という現象 (端的に表せば, /z/ > /r/. 以下「r 音転換」と呼ぶことにする) は, 結論的には, 標準英語が構築される過程で少なからぬ影響を持つと言わねばならないだろう.

言うまでもなく, 英語は言語系統上インド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に属し, その意味でいわゆる「ドイツ語」の仲間であると言っている. 元々ブリテン島のイングランド地域に住んでいたのは島嶼ケルト語に分類されるブリトン諸語 (Brythonic/Britonic languages) を話すブリトン人であり, 「その上に」オランダ北部・北ドイツ・ユトランド (ユラン) 半島などから, ある種のドイツ語を話す人々が大挙して押し寄せ, 住み着いたことがそもそもの英語の出発点となっ

ている。²⁾ つまり、発生的に見て、英語には遺伝子レベルでは他のドイツ語系言語と共有する部分はかなり見られるということだ。このような状況下で、この「r音転換」という現象が英語の発達とどのような関わりを持つのかを整理していくことが本稿の主目的である。さらには、この「r音転換」と「r音発音 (rhoticity)」を持つ「r音発音方言 (rhotic dialects)」との関わりをも考えていくことにする。

本稿の構成は次の通りである。次節では、印欧祖語からゲルマン語群へ至る過程での子音変化を概観し、そこでこの「r音転換」の位置付けを確認する。続く3節では、主に Robinson (1992) に拠りながら、そのゲルマン諸言語での分布状況を考察し、特に OE と「古ノルド語 (Old Norse : ON)」との関連を探る。4節では、新たに方言地理学・社会言語学的視点をも踏まえて、「r音転換」を「r音発音」と絡めて検討する。そして、最終節で本考察をまとめることにする。

2 印欧語からゲルマン語へ

歴史言語学、とりわけ比較言語学の分野での様々な言説の精密化は、今世紀に入ってから、新しい考古学上の発見などに伴って、着実に行われ続けてきた。例えば、前世紀にもはやされた西のケントウム (Centum) 語群と東のサテム (Satem) 語群という印欧諸語東西二分論などは、印欧語地域の東端に発見された、ケントウム語群の特徴を持つトカラ語により修正を余儀なくされている。あとでもう一度触れるが、サテム語群を革新と見ると、より古いケントウム諸語は周辺部に残存するという方言地理学的説明は、単純な東西二分法よりも当を得ていると言えよう (ギルマイスター, 2000 : 3-4)。³⁾

このようなことがままあるとは言え、20世紀に入ってから概略支持され続けている理論のひとつに「ゲルマン子音推移 (Germanic Consonant Shift)」が挙げられる。これは、「第一次」と「第二次」に類別され、前者は印欧語とゲルマン語を区別する特徴として、また後者は、西ゲルマン語内で北部の「低地ドイツ語 (Low German : LG)」と南部の「高地ドイツ語 (High German : HG)」を峻別する尺度として機能している (言語系統的に見て、PDE は LG に属し、現代標準ドイツ語は HG に属する)。特に、前者に関しては、1822年の著書で、その周期性 (Bammesberger, 1992 : 38 参照) を指摘した点が大きく取り上げられたということから、その主唱者であるヤーコプ・グリム (Jacob Grimm [1785-1863]) の名を冠した「グリムの法則 (Grimm's law)」という呼び方が人口に膾炙している。⁴⁾ 試みにこれを極度に単純化して記述すると以下のようなになる。

- (1) 印欧祖語 (PIE) : 有声閉鎖音 /b/, /d/, /g/ → ゲルマン語 (Gmc.) : 無声閉鎖音 /p/, /t/, /k/
 無声閉鎖音 /p/, /t/, /k/ → 無声摩擦音 /f/, /θ/, /x/
 有声帯気閉鎖音 /bh/, /dh/, /gh/ → 有声閉鎖音 /b/, /d/, /g/
 N. B. PIE : Proto-Indo-European & Gmc. : Germanic.

具体例としては、次のようなものが挙げられよう (ギルマイスター, 2000 : 12)。

- (2) OChSl. *slabu* 'slack' → OE *slæpan* 'sleep', L *decem* → OE *tene* 'ten',⁵⁾ L *iugum* → OE *geoc* 'yoke'
 L *pater* → OE *fæder* 'father', L *frater* → OE *broþor* 'brother', L *centum* → OE *hund* 'hundred'
 Skt. *bhrata* → OE *broþor* 'brother', Skt. *madhyas* → Goth. *midjis* 'middle',

Skt. *stighnoti* → OE *stigan* 'climb'

N.B. OChSl. : Old Church Slavonic, L : (Classical) Latin, Skt. : Sanskrit, & Goth. : Gothic.

上記 (2) では、PIE の音体系を継承している古教会スラヴ語・(古典) ラテン語・サンスクリット、一方子音推移を被った Gmc. としては、OE とゴート語が例示されているが、ここであることに気づく。それは、L *frater* は OE では *broþor* となり、グリムの法則通り、/t/ から /θ/ への推移が見られるが (現在の発音 /brʌðə/ に見られる /θ/ から /ð/ への変化は、グリムの法則適用後の発達である)、同じようなパタン of L *pater* は OE では *fæder* であり、/t/ から /d/ (Gmc. 全般では /ð/) へ推移している。つまり、有声化を起こしているのである。この現象は早くから指摘され、グリムの法則の例外と見なされていた。しかし、デンマークの言語学者カルル・ヴェルネル (Karl Verner [1846-1896]) が 1877 年に発表した論文によってこの現象を實に見事に説明する。⁶⁾ すなわち、当該子音の直前の音節に強勢がないときには、下例 (3) のように、グリムの法則で産出されるはずの子音が有声化を起こすのである。

(3) PIE *pǝtér → ① OE *fǝþér → ② OE *fǝdér → ③ OE fáder

レベル①では、単純にグリムの法則が当てはめられ、*fǝþér が生成されるが、直前の音節に強勢がないために当該子音が有声化した *fǝdér を生成する②のレベルに至る。しかし、最終的には強勢が第 1 音節に移動して③のレベルの fáder に達し、そこから PDE の fáther へ発達したのである。⁷⁾ なお、PDE でも強勢の移動による有声化の現象は見られる。possible /pasəbl/ に対する posséss /pəzəs/ や exhibition /eksəbɪʃən/ に対する exhibit /ɪgzɪbɪt/ などがそうである。

上記のような有声化は、もう一つ重要な音変化を引き起こしている。それがいわゆる「r 音転換 (rhotacism)」である。実は、西および北ゲルマン諸語では、ヴェルネルの法則で得られた /z/ は、母音間や語末にある場合、/r/ へ転換する。一般に PIE の /s/ は Gmc. では /s/ のまま継承されたが、強勢の位置によってはヴェルネルの法則が適用され、/s/ から /z/ へと推移した (possible /pasəbl/ vs. posséss /pəzəs/ 参照)。それがその後、さらに /r/ へと進む場合があったのである (下例 (4) 参照)。

	不定詞形	過去単数形	過去分詞形
PIE	*gǝús-	*gǝús-	*gus-
Gmc.	*keus-	*kaus-	*kuz-
OE	ceosan 'choose'	ceas 'chose'	coren 'chosen' — Bammesberger, 1992 : 39

すなわち、OE *cozen が r 音転換により、coren となったのであろう。

では、なぜそのような変化が起きたのか。その理由は定かではないが、/z/ は有声歯茎摩擦音 (voiced alveolar fricative) であることを考えると、調音位置的には /r/ も歯茎 (後部) 付近で生成されることから、その移行は不自然なものではない。また、一面、/z/ が /r/ 化するということは、より母音性 (vowelness) を帯びるということにもなろう (註 1) 参照)。このことはドイツ語で定冠詞男性単数形 1 格 der (-r が語尾にあり、その直後に母音による支えがない構造) は、一昔前までは「デル」と発音されていたが、現在では「デア」となってしまうことにも観察される。これは、ゲルマン語で唯一 r 音転換を経験しなかった東ゲルマン語のゴート語はまた、ゲル

マン語で唯一「ウムラウト／母音変異 (Umlaut/vowel mutation)」をも持たない点と何らかの繋がりがあられるのかもしれない。⁸⁾

以上まとめると、PIE から Gmc. へと分化していく際に、大きな子音推移がありその余波として、西・北ゲルマン諸語では r 音転換が発生してると言える。

3 古英語 (西ゲルマン語) vs. 古ノルド語 (北ゲルマン語)

民族的には、ゲルマン諸部族は通常次のように分けられている (シルト, 1999: 10-12 & ギルマイスター, 2000: 15-16)。

(5) 北ゲルマン: 北ユトランド・南スカンジナビアに定住した、後のデンマーク・スウェーデン・ノルウェー人

南ゲルマン:

- ①北海ゲルマン: イングヴェオーン族 (アングル人・サクソン人・フリジア人など)
- ②ヴェーザー＝ライン・ゲルマン: イストヴェオーン族 (ヘッセン人・フランク人など)
- ③エルベ・ゲルマン: ヘルミノーン族 (ランゴバルト人・アレマン人・バイエルン人など)
- ④オーデル＝ヴァイクセル・ゲルマン: ゴート人・ブルグント人・ヴァンダル人⁹⁾

Robinson (1992) では、上記のようなゲルマン民族が使用した古ゲルマン諸語の音韻的・形態的特徴がコンパクトにまとめられている。そこで取り上げられるのは、東ゲルマン語のゴート語 (Gothic: Goth.), 北ゲルマン語の古ノルド語 (Old Norse: ON), 西ゲルマン語の古サクソン／ザクセン語 (Old Saxon: OS), 古英語 (OE), 古フリジア語 (Old Frisian: OFri.), 古低地フランコニア／フランケン語 (Old Low Franconian: OLFra.), そして古高地ドイツ語 (Old High German: OHG) である。

Robinson はまた、西ゲルマン諸語の中で OE と OFri. を 1 グループ、その他をドイツ語のグループとし、前者をアングロ・フリジア語 (Anglo-Frisian), 後者をドイツ祖語 (Proto-German) と呼び、ドイツ祖語はさらに古低地ドイツ語 (Old Low German: OLG) と OHG に分けている。この OLG には前出の OS や OLFra. が属するのである (p.12 & p.248)。

言語系統的に言えば、英語と最も近い関係にある言語はフリジア語なので、アングロ・フリジア語という塊を作ることに異存はないが、Robinson のようにこれをドイツ祖語と平行させてたてること、すなわち、アングロ・フリジア語を低地ドイツ語 (LG) と高地ドイツ語 (HG) と並べることには賛成しかねる。筆者としては、あくまでも英語は北部西ゲルマン語である LG の一部として捉えたい。なぜなら、西ゲルマン諸語で第 2 次子音推移を経験したのは南部の HG だけだからである (Vennemann, 1984 の主張はもっと過激で、HG の子音推移は二次的なものではなく、Gmc. から直接もたらされたとする。つまり、HG とそれ以外の全てのゲルマン語という括り方になる)。¹⁰⁾ だが、Robinson 流の三部構成では、英語もまたオランダ語などのように、LG の一大特徴である第 1 次子音推移しか経ていないことを理解できない。

さらには、元来英語は、オランダ・ドイツ北部、ユトランド半島などからブリテン島のイングランド地域に移り住んだアングル人、サクソン (ザクセン) 人、ユート人、フリジア人、フランク人などが建国した諸国で話された言語の「総称」であることを考えると、まさに LG に属する

ことが窺い知れよう。しかも、一般に我々が OE として認識しているのは、(後期) ウェスト・サクソン (West Saxon) 語/方言という「書き言葉」の標準形であり、これがサクソン (ザクセン) 語の系統であることは覆うべくもない。ただ、ここがクルーシャルなのだが、英語は実は純粋なサクソン語の延長としては発達していかなかった事実がある。むしろ、大都市ロンドンを含む「マーシア (Mercia) 方言 (アングリア [Anglia] 方言に属する)」を母胎として、ノルマン人によるフランス語支配のもとで中英語 (Middle English : ME) 以降発展していくのである。イギリス人が後世あれほどサクソンのものに対してこだわるようになるのは (Briggs, 1999³: 39-52 でさえも、常に伝統的な Saxon(s) という総称表現を用いている)、ひとつには、英語にこの OE 時代のような純ゲルマン語的均一性 (OE の実体はもっと「不純」なものにもかかわらず) を求めたからに他ならない。このことに関して、ギルマイスター (2000: 22) は、「ウェスト・サクソンの文学語は継続しなかったのに対して、英語が今日 [サクソンではなく] イングリッシュ (English) - *englisc* 『アングル人 (Angles) に属する』 (i-ウムラウトによる) - という名称を持つのは正当である」と述べ、その「サクソン語」から「アングル語」への不連続性を指摘している。したがって、ある意味、OE と ME とでは単純に「同じ英語」とは言えない部分が多々あり、にもかかわらず、OE や ME などという言い方をすることは、英語があたかも同一直線上で発達してきたかのような錯覚を与える。OE そのものでさえ純粋な言語とは言えないのに、これはある種の欺瞞であるとして、ノールズは痛烈に批判している (1999: 37-38).¹¹⁾

以上のように、OE とは言え、それは事実上 (ウェスト・) サクソン語を指しているということも考慮して、以下の Robinson が提示する表を見てみよう (pp.250-251, 一部抜粋)。

(6)	Goth.	ON	OS	OE	OFri.	OLFra.	OHG
Umlaut	-	+	+	+	+	+	+
Sharpening	+	+	-	-	-	-	-
Rhotacism	-	+	+	+	+	+	+
<i>ngw</i> → <i>ng</i>	-	-	+	+	+	+	+
<i>fl-</i> → <i>þl-</i>	+	-	-	-	-	-	-
Gemination	-	<i>kk, gg</i>	+	+	+	+	+
Assibilation	-	-	-	+	+	-	-
<i>CrV</i> → <i>CVr</i>	-	-	-	+	+	-	-
(<i>r</i> -Metathesis)							
Consonant shift	-	-	-	-	-	-	+
Gmc. * <i>-az</i>	<i>-s</i>	<i>-r</i>	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ
<i>a</i> -stem, m.n.pl.	<i>-ôz</i>	<i>-ar</i>	<i>-os</i>	<i>-as</i>	<i>-ar, -a</i>	<i>-a</i>	<i>-a</i>

N.B. m. : masculine, n. : nominative, & pl. : plural.

Robinson は全部で 31 個の音韻的・形態的ポイントについて調査しているが、ここではそのうちの 11 個について掲載した。

一見して理解できるのは、OE が OS と OFri. の特徴を併せ持つという点であろう。OE が OFri. とは共通して持つが、OS とは共通しない特徴は、「擦音化 (assibilation)」（下例 (7a)）と「r 音位転換 (*r*-metathesis [Jones, 1989: 190-195])」である (下例 (7b))。

- (7) a. OE *cirice* /tʃ/ vs. OS *kirika* /k/ 'church' Cf. OFri. *tsyurka* /ts/
 b. OE *beornan* vs. OS *brinnan* 'burn' Cf. OFri. *berna*

— Robinson, 1992 : 159-160&192-193

このことはアングロ・フリジア語というグループをたてる正当性を支持する。しかし、その一方で、OEの「a語幹 (*a-stem*) の男性名詞複数主格」形は、下例のように、OFri. よりもむしろOSに類似している。

- (8) OE *fugelas* vs. OS *fuglos* 'birds'¹²⁾

— Robinson, 1992 : 123 & 160

これに対し、OFri.でのその語尾は、*sîthar* 'colleagues' の -ar や *dega* 'days' の -a であるだけでなく、-an, -er, -en などもあり、方言によってかなりバリエーションがあったようだが、少なくともOEやOSに見られる -a/os の '-s' は発見されていない (Robinson, 1992 : 193)。この名詞の変化語尾に関する議論はあとで重要なポイントになってくる。

また、次の高橋 (1994 : 12-13) が示す、OSの作品である『創世紀』中の「アダムの嘆き」の一部分とそのOE訳の比較を見れば、いかに両者が類似しているかが理解される。

- (9) OS Hū sculun wit nū libbian
 OE Hū sculon wit nū libban
 Cf. OHG Wuo sculun wir nū lebēn 'How should we now live'

さて、問題の r 音転換のことである。先述したように、ゲルマン諸語で唯一これを経なかったのは、東ゲルマン語の Goth. であり、他の北・西ゲルマン諸語では一様に r 音転換は観察される。また、「ウムラウト」に関しても同様の分布を示す。さらに、今度は逆に、「無声歯唇摩擦音+側音流音 (fl-)」の「無声歯間摩擦音+側音流音 (ɸl-)」への変化は Goth. だけのものであり、他のゲルマン語には見られない (例えば、Goth. *ɸliuhan* vs. OHG *fliohan* 'flee' [Robinson, 1992 : 59-60])。高橋 (1984 : 95-99) は、Goth. の「保守性」として前二者を指摘しているが、後者の歯間音化はむしろ革新と言ってよく、千種 (1997 : 512) でも、ɸl- で始まる単語は、上記の *ɸliuhan* 以外には、わずか3例しか記載されていない (*ɸlahsjan* 'threaten,' *ɸlaqus* 'soft, bendable,' & *ɸliúhs* 'flight')。いずれにせよ、Goth. がゲルマン諸語の中でかなり特殊な位置を占めることは間違いのないようだ。そしてその Goth. にいくつかの点で共通性を見せるものが、ON である (註9) 参照。

ON と Goth. は、「半母音の嬰音調化 (sharpening)」を行い、なおかつ /ɣgw/ という連鎖の /w/ を保持する点で他のゲルマン語と一線を画しているし、また、「[二音節にまたがる] 子音重複 (gemination)」は、西ゲルマン諸語では広く普通に見られるのに対して、Goth. では皆無であり、ON でも、軟口蓋閉鎖音の /k/ と /g/ に限られ、その範囲は非常に狭いという特徴がある。以上により、ON の位置関係が浮かび上がってくる。それは、Goth. と西ゲルマン諸語の中間に位置すると言っていいであろう。

実は、r 音転換に関して、ON には興味深い事実がある。碑文に現れるルーン文字 (特に *older futhark* と呼ばれるもので、これを「ルーン文字ノルド語 [Runic Norse : RN]」という) には、例えば、*runaR* 'runes' などに見られるローマ字転写で《R》と表記される文字があるのだが、これは Gmc. の /z/ が r 音転換を起こす途上にあるものと考えられ、その発音は現代チェコ語にも見られ

る《r̥》という文字のそれであり、調音音声学的に言えば、「巻き舌の後部歯茎破擦音 (rolled post-alveolar affricates)」(Short, 1989:371)である。¹³⁾ まさに、これはONがGoth.とは区別され、むしろ西ゲルマン諸語の特徴を手に入れたことを意味し、最終的には、この《R》がいわゆる「r (trilled r)」音と同一視されるようになるのである (Gordon & Taylor, 1957²:268).¹⁴⁾ したがって、先ほどのRN runaRはONでは rúnar ‘runes’ (o- 語幹女性名詞複数主格)として実現されている。

このように、ONはその古層でGoth. 的特徴から一部離脱し、西ゲルマン諸語に共通する特徴を得るに至ったわけだが、その後の展開から見ると、どの西ゲルマン諸語よりも徹底してr音転換の痕跡を保持したと言っていい。通常r音転換は、以下のように語中または語尾で生起するが、ONでは特に、転換した語尾-rが保持されたのである。

(10) a.	Goth.	ON	OS	OE	OFri.	OLFra.	OHG	
	maiza	meira	mêro	māra	mārra	mêrra	mêro	‘more, greater’
b.	Goth.	ON	OS	OE	OFri.	OLFra.	OHG	
	dags	dagr	dag	dæg	dei	dag	tag	‘day’ — Robinson, 1992

Gmc. の *-az という語尾を持つ「a- 語幹男性名詞単数主格」は、Goth. では、-s という形で残存したが、これがONでは-rとなり、いわゆるr音転換を起こした。¹⁵⁾ しかし、その他の西ゲルマン諸語では、(6) や (10b) から分かるように、これを全く欠いている (これは、これまでの議論からすれば、西ゲルマン諸語ではオリジナルの *-az をいきなり切り落としたというよりはむしろ、一旦r音転換を起こしたものの、最終的にはその-rを脱落させたと考える方が順当であろう)。¹⁶⁾

さらには、当然のごとく、ONの「a- 語幹男性名詞複数主格」では-r語尾が現れるが、OFri.を除いて、Goth.をはじめOSやOEでは-s語尾であるし、その他は語尾の子音そのものを欠いている。また、OFri.に関しても前述の通り一貫して-rが現れるのではなく、-nやゼロ子音もあることから、ONと同様の分布とは必ずしも言い難い面がある。これに対して、ONにおける-r語尾の徹底した拡大は以下のような、a- 語幹以外の強変化男性名詞の語尾変化からも窺い知ることができる (ちなみに、現代デンマーク語では大多数の名詞は [のみならず、動詞の現在形形成の際にも]、語尾に-(e)rを付加するだけで複数形にすることができる [岡田他, 1984: 53-54]).¹⁷⁾

(11) ja-	語幹男性名詞複数主格:	niðjar ‘kinsmen’	Cf. 単数属格:	niðs
wa-	語幹男性名詞複数主格:	songvar ‘songs’		songs
i-	語幹男性名詞複数主格:	staðir ‘places’		staðar
u-	語幹男性名詞複数主格:	skildir ‘shields’		skjaldar
	子音語幹男性名詞複数主格:	vetr ‘winters’		vetr

— Gordon & Taylor (1957²: 284-288)

また、複数主格形ではないが、単数属格形に関しても、他の西ゲルマン諸語では、(特に男性名詞は)-es や -as などの-sを含む語尾が主流であるのに対して (高橋, 1994: 33-43 参照), ONでは、同様に-sを含む部分がある一方で、-r語尾も見受けられ、この-s /s, z/ ~-r /r/ が観察できる (英語では、これを最終的には「-s」として分離させるという特異現象が起きている。もちろん、この現象は「his 属格」との相互作用の結果であろう)。

このようにONには、ある特定の名詞の単・複数主格や単数属格という広い範囲に-r語尾が現れ

る。そしてこれは名詞にとどまらないのである。

以下の(12)で、OE・ON・OS・OHGにおける「be動詞」の直説法語形変化を見てみよう。複数形については、OE以外は人称の区別を持っている(参考までに、ONの末裔である現代デンマーク語も示す)。

(12) 直説法	OE	ON	Cf. Danish	OS	OHG	
1 人称単数現在	eom,	bēo	em	er	bium/-un	bim/-in
2 人称単数現在	eart,	bist	ert	er	bis(t)	bis(t)
3 人称単数現在	is,	biþ	er	er	is(t)	ist
複数現在	sind/-on (e)aron [Anglian]	bēoþ	eru/-m/-uð	er	sind/-un, sint	birun/-umēs/-ut, sint
1 人称単数過去	wæs		var	var	was	was ¹⁸⁾
2 人称単数過去	wære		vart	var	wāri	wāri
3 人称単数過去	wæs		var	var	was	was
複数過去	wæron		vāru/-m/-uð	var	wārun	wārun/-ut

(12) から分かるように、OEのbe動詞には、形態上三系列が認められるが、Lass (1994: 170) はこれを“a collection of semantically related paradigm fragments”としている。その三系列とは以下の通りである。

(13) a. s-root :	eom, eart, is, sind(on)	< L sum, es, est, sunt ‘be’
b. b-root :	bēo, bist, bit, bēot	< Skt. bhū- ‘remain’
c. w-root :	wæs, wæron, (wēsan)	< Skt. vasati ‘he dwells’

(13c)の直説法過去形に使用される「w-語根」系列に関しては、OEのみならず、OSやOHGでも同様の展開を見せるが、直説法現在形では、(13a & b)のように、OEでは純然たる二系列を有しているのに対して、OSやOHGではその「融合形」が採られている。Lass (1994: 171)によると、どうやらこの「b-語根」の導入は西ゲルマン諸語での革新であるらしい。¹⁹⁾ただ、特筆すべきは、その取り入れ方がOEとその他の言語では異なっていた点である。OEは、ONがそうしたように、「s-語根」を完全に保存したが(恒常的ではないが、その二系列は意味的な区別があったようである [Hogg, 1992b: 164])、OSやOHGは1人称単数形と2人称単数形に「革新形」を導入したのである。

ここで、r音転換に注目してみると、まず、be動詞過去時制活用の2人称単数や複数形において、北・西ゲルマン諸語ではr音転換が起きたことが分かる(Cf. Goth. wêzun ‘were’)。しかし、ONに関しては、1人称及び3人称単数形までもが、-r語尾に転換している。これに対して、西ゲルマン諸語の語尾は-sである。r音転換が起きていないところを見ると、おそらくこれは当初/s/と発音されたのであろう。だが、特に英語では、これが後に「有声化」を被り(ME以降のことと思われる)、/z/に変化したと考えられる。

もう一つの大きなポイントは、アングリア方言の3人称複数現在形(e)aronの存在である。前述したように、ここで言うOEとは(ウェスト・)サクソン方言のことであるので、その3人称複数現在形sind(on)がOHGのsintや、特にOSのsind(un)に酷似していても何ら不思議はない。

それよりもむしろ、この (e)aron が ON の eru (-m/-uð) に極めて類似していることが指摘されるべきであろう。つまり、マーシアやノーサンブリアなどの地域で話されたアングリア方言には、もともと ON との繋がりがあり、それが後のデーン人の定住によって強化されたのではないかと考えられるのである (ノールズ, 1999: 40)。

まず第一に、アングル人は、イングランドに移植する前はユトランド半島の中南部に居住していたとされるが、本当に民族全体がイングランドに移住してしまっていたのかどうかは疑問が残る。その後、ユトランド半島にはデーン人が南下し、移住することになるのだが、このユトランド半島の言語 (イングランドのケント方言となったとされるユート人のユート語も含めて²⁰⁾) とスカンジナビア半島の言語は、元々共通点をいくつも持っていたと思われる。その上で、実状は、ユトランド半島に残留したアングル人のアングル語を吸収・確立した、ON の一派であるデーン/デンマーク語が、再びイングランドでアングリア方言との接触を果たしたということになり (つまり、「再接触」)、そのような複雑な事情から、南部の (ウェスト・) サクソン語とは違った形態が北部方言では保持されたものと考えられる (松瀬, 2000: 49 参照)。そして、後年何とも皮肉なことに、英語の「正統な」血筋を引いていない (サクソンのでない) この北方方言形である (e)aron こそが、イングランドの言語の標準形 are を形作るに至るのである。

次に、以下の (14) で示されるような、強変化動詞の直説法「3 人称単数現在形」の語尾に注目してみる。この場合、OE・ON・OS・OHG で「運ぶ (bear)」を表す動詞を取り上げているが、他の強変化動詞においてもこの型は、大体において当てはまると言っている (のみならず、もっと言えば、弱変化動詞でも同様の型が観察される)。

(14) 直説法 'bear'	OE	ON	OS	OHG
3 人称単数現在	bir(e) <i>þ</i>	berr	birid <i>l-itl-ið</i>	birit

西ゲルマン語系では、3 人称単数現在のマーキングに /θ, ð, t, d/ などの歯(茎)音を利用するのに対して、ON では、やはり -r 語尾が見られる。ところが、同じ OE でも、ウェスト・サクソン方言ではないものには、別の形態が現れることがある。それが「-s 語尾」である。

(15) eghwelc forðon se ðe giuæð vel biddes onfoeð	
'for everyone who asks receives' (Matthew, 7:8)	— ノールズ, 1999: 40

ノーサンブリア方言 (アングリア方言の一種) で書かれた『リンディスファーン福音書』(10 世紀) の (15) の箇所では、ラテン語の petit 'asks' を訳出して、giuæð vel biddes と表現しており、ここには、西ゲルマン語系の -ð / -þ (-th) 語尾と並んで -s 語尾が使用されていることが観察できる。

さらにおもしろいことに、この -s 語尾は 3 人称複数現在形にも現れるのである。²¹⁾

(16) ðer ðeafas ne ofdelfes ne forstelað	
'where thieves neither break in nor steal' (Matthew, 6:20)	— ノールズ, 1999: 40

ウェスト・サクソン方言の 3 人称複数現在形語尾は -að / -aþ (-ath) であり、それは forstelað に見られるが、その一方で、ofdelfes のような -es 語尾も現れている。この、事実上 thieves never breaks

in とでも転写できそうな表現は、17世紀まで北部方言の特徴だったらしい（ノールズ、1999：41）。この奇妙な混交現象は、文語標準語としてのウェスト・サクソン方言の浸透とそれに対する各地方方言の抵抗という方言間の（無意識的及び意識的）「闘ぎ合い」を表しているように思える。結局、この「-s対-th」抗争は、3人称単数現在形に関しては、（1611年の『欽定訳聖書』でさえも、-th語尾を採用しているにもかかわらず）-s語尾の勝利という形で、また、3人称複数現在形については、両者とも採用されず、「ゼロ語尾」という形で標準形に反映されていくことになる。

このように、areにしても、3人称単数現在形-s語尾にしても、OEの嫡流ではない形式が存続している点で、英語は特異な発達を遂げたと言わねばならない。そしてそこには、ONによる直接・間接の影響が見て取れるのである（語彙的な面では、人称代名詞のthey--their--themそしてsheの標準形への採用が挙げられよう [Hughes, 2000:136]）。ここで指摘した、デーンロー地域の「アングリア方言英語」の3人称単数現在形語尾-s (/z/と発音されたい)は、明らかにそのON系相当語尾の-rに対応するものと言っている（ノールズ、1999：40）。ONでは極度に進行したr音転換によって得られた音は、西ゲルマン諸語に共通だった歯（茎）音にかわって、イングランド北東部の言語にその対応物である-sを導入させたのである（北東部では、be動詞の直説法1人称現在形として'I am'の代わりに、'I is'を使う地域があるが、この-s形はやはりONのer形の影響であるとされる [Trudgill, 1999²:107]）。ここで、アングリア方言が直接-r形を取り入れなかったのは、語末でのr音転換をONほどに容認する音体系の土壌がなかったためであろう（Makaev[註16]参照）が言うように、西ゲルマン諸語では、-aRが存在したにもかかわらず、結局それを完全にr音へと転換させることなく消滅させてしまった可能性があるわけだから）。

4 R音発音 vs. 非R音発音

前節で見たように、特に動詞に関しては、ONはr音転換で得られた-r語尾を保存する傾向が顕著であり、このことが、最終的に英語に対してその対応物である-s語尾を出現させた。英語は、このような形でONの影響を大きく被っていると言わねばならないが、このr音転換の結果できたrも、そうでないrも、r音自体に関して言えば、さらに特殊なことが英語では起こっている。

例えば、be動詞の直説法単数2人称及び複数過去形のwereは、r音転換によって得られた形である（その他にも、ear[< OE ēare]やdeer[< OE dēor]といった例が挙げられる [Hogg, 1992a:74]）。OEの頃は、それらは、wære, wæronであったから、それぞれ/wæ:re/, /wæ:ron/と発音されていたであろう。ところが、両者はPDEでは、/wə:(r)/となってしまっている。起源的には、これは語中におけるr音転換によって生じた-r-なのだが、形態的に見て、英語の動詞全体の屈折語尾が簡略化し、さらには消失することによって、音声的に-r語尾と同じレベルに立ち至っていると言える。このような状況の下で、PDEのwereには、その発音表記にも示されているように、/wə:(r)/と/wə:r/の二種類の発音が観察されるのである。そして、後者に見られるような、母音直後の(postvocalic) r音を発音する方言を「r音発音方言 (rhotic dialect)」と呼び、この方言は「r音発音 (rhoticity)」を持つと規定されている。

一般に、アメリカ英語 (AmE) がこのr音発音方言にあたりとされており、これに対して、イギリス英語 (BrE) はr音発音を欠く (r-less) とされるが、ことはそう単純ではない。

Downes (1998²:133-175) は、このr音発音に関する詳細な考察を提供してくれているが、BrE

でも、(アイルランド・スコットランド,) ノーサンバーランド, リヴァプール周辺, ブリストルを含む南西部の広い地域などでは, r音発音が聞かれるし(これを Chambers & Trudgill, 1998²: 94-95は「残留地区 (relic area)」と呼んでおり, この残留地区は毎年縮小化の傾向にあることが, Trudgill, 1999²: 54で指摘されている), また, 逆に AmEでも, 東部ニューイングランド, ニューヨーク市, サウスカロライナなどでは, 一般に r音発音はなされないのである。だが, もっと突っ込んで言えば, このような地理的要因だけでなく, 社会階級(労働者階級か中流階級か)や民族・人種(白人か黒人か)などのパラミターによっても, この r音発音の有無は揺れ動くし, さらに, この r音発音を左右するかなり大きな要因として「威信 (prestige)」が挙げられよう。

方言地理学では, 方言特性がある地点を中心として放散的に分布しているときはその地域を「有心地区 (focal area)」というが(大塚・中島, 1982: 654), 上述の BrEにおける r音発音地域の分布は, ロンドンを有心地区とする非 r音発音地域の周辺部にあたっている。つまり, 威信を持つ革新である非 r音発音がロンドンを中心として広がっていき, 相対的に古風となった r音発音を残す地域(残留地区)がその外縁部に展開する形になっているのである。ただ, 先ほども指摘したように, 問題は単純に地理的にのみ処理することはできない。同じリヴァプール周辺でも, 相対的に田舎の部分の方が, 都会の部分よりも r音発音の分布が多く見られるという事実は, 都会では威信を持つ発音である非 r音発音が好まれることを示している。ある種の上昇志向と云っていい。このことはまさに, BrEにおける階級方言の頂点に立つ「容認発音 (Received Pronunciation: RP)」が非 r音発音であることから窺い知ることができる(Downes, 1998²: 140)。

このような威信形の伝播は, なにも一国内にとどまらない興味深い例が(しかも r音に絡んで)報告されている。それは, r音の中でも, 「舌背 r音 (dorsal r)」とか「後部軟口蓋 r音 (uvular r)」と呼ばれるものである。Chambers & Trudgill (1998²: 170-175)によれば, フランス語のパリ方言にこの音が現れるのが1600年代であり, 1780年までには, ベルギー, スイス, オランダ, ドイツを経てデンマークのコペンハーゲンにまで到達した。そして, 1890年までには, 南スウェーデンへと拡散した。この波はさらには, ノルウェー南部のベルゲン周辺やクリスチャンサン周辺にまでも及んでいる。パリのフランス語というヨーロッパレベルでの威信形が周辺諸国に与えた多大なる影響の一例と言える(もちろん, 上記の国のあらゆる階層が後部軟口蓋 r音に移行したわけではない。デンマークやノルウェーのように, オランダ, ドイツについては, ハーグ, ケルン, シュトゥットガルト, ベルリンといった(大)都市部では後部軟口蓋 r音が一般化しているが, その他の部分では, 教育の程度によって受容度に違いが見られたりする [p.175])。

では, 英語に関して, いったい, いつ頃から, このような威信形である非 r音発音が発生してきたのか。Downes (1998²: 157-158)は次のようにまとめている。母音直後の rを発音しないこと自体は, その rの直後に「歯音 (dentals)」がある環境に限られるのだが, 早くも14世紀に現れるとする見方がある一方(Hill, 1940), 15世紀ぐらいから, r音自体の発音の「弱化 (weakening)」が生じ, いわゆる顫動音から継続音/接近音に次第に移行していくなかで, ある環境においては, r音そのものが消失することがあったとする立場もある(Wyld, 1920 & Jespersen, 1954)。これに対して, 上記のような r音消失は決して一般的なものではなく, r音発音方言でも揺れのあるところであるので, 本格的な非 r音発音の登場はもっと時代を下らねばならないとする意見もあり(Stephenson, 1977), どうやら, この非 r音発音が標準ロンドン英語に組み入れられるのは, 18世紀後半であるという観測が大勢を占めているようである。²²⁾ とすれば, 非 r音発音という革新が威信を発揮するのは, むしろ19世紀以降ということになり, その歴史は, 現在

までたかだか二世紀にすぎないことになる。このことは逆に、北米に移入された英語 (AmE) については、その当時は、非 r 音発音が威信形であるとは認識されていなかったことを示している。したがって、北米東部のニューヨーク市が非 r 音発音地域とされることから、一見すると、そこではイギリスでの威信形をそっくりそのまま取り入れたようにしばしば思われるが、そうではない。Labov のあの有名な、デパート店員による r 音使用の観察からも明らかのように、実は、高級店になるほど、r 音発音が聞かれるのである。つまり、r 音発音の方が威信形となっているのであって、ニューヨーク市での非 r 音発音は「カジュアルな」言語使用の場での特徴に過ぎないのだ。²³⁾

ここで、おもしろいことが明らかになったかと思う。3 節までの r 音転換にまつわる議論では、それを大幅に取り入れた ON と、r 音そのものではないが、その対応形 -s /z/ を保持した OE の間に密接な繋がりが見られた。しかし、最終的に、ON の末裔であるデンマーク語では、r 音転換によって得られた r は、同じヨーロッパに位置するフランスでの威信形 r 発音の影響でその音質が変化させられることになり、イングランドでは、r 音転換によらない r も含めて、母音直後の r は、いわゆる威信形である標準形 (RP) からは、その発音そのものが失われたことになる。さらに、逆に、北米に根付いた AmE では、r 音発音の方が威信を持つという結果をも生み出している (ひとつには、綴り字に忠実に r を発音することの方が、より「正しい」という認識が働いているようだ。これは、特に教育を通じて浸透していく)。発音の変質と喪失と再興である。

結局、両者とも、ゲルマン語のレベルでは、何らかの形で r 音転換という純粹に言語的な操作を受けたと言えるが、特に近代語のレベルにおいては、社会の発達に伴って、その r 音にまつわる環境が、今度は言語的ではない様々な要素の影響を多大に受けるようになったと言わねばならない。その最たるものが、政治的・経済的「権力」を背景とした「威信」なのである。

5 ま と め

英語 (いや、アングル語と言うべきか) は、言語系統的には、①印欧語族、②西ゲルマン語派、③低地ドイツ語系、④アングロ・フリジア語に属する言語である。

ここで、是非とも気を付けておかなければならないのは、その通時的発達を見たとき、「古英語・中英語・近代英語」といった紋切り型の区分では言い尽くせない発達構造を、英語という言語は持っていることである。我々が一般に古英語と認識しているのは、(後期) ウェスト・サクソン語 / 方言であり、大陸の古サクソン (ザクセン) 語と非常に似通った言語なのである。しかし、その後の英語、特にその標準形は、このサクソン語ではなく、東 (北) 部の「アングル語 / アングリヤ方言」を主体にしながら、(ウェセックスの中心地ウィンチェスターではなく) ロンドンを中心として発達していく。そして、この東 (北) 部のアングリヤ方言は、それ自体が北ゲルマン語派の古ノルド語と密接な関わりを持っている上に、デーン人らスカンジナビアからのヴァイキングの移住に伴って、そのノルド語的な特徴を強化された言語なのである。その強化の一例として、本稿では「r 音転換」をキーワードとしながら、その対応物である -s 語尾 (発音は /z/) が、このアングリヤ方言を通じて標準英語に定着していった流れを見てきた。

さらには、r 音発音と非 r 音発音という対比に見られるような、「威信」が言語に及ぼす影響という観点からすると、標準英語において、他の西ゲルマン語系で一般的だった直説法 3 人称単数現在形の -th という歯音語尾が、最終的に北ゲルマン語系の -r 語尾に対応する、アングリヤ方言

の-s 語尾に取って代わられた背景には、この威信が何らかの形で反映したものと思われる。

このように、言語変化には、純言語的なものと非言語的なものがあり、それらが入り乱れながら、言語は様々な様相を呈していくのである。我々はそのどちらにも偏ることなく、言語変化のありのままを注意深く観察していかなくてはならない。

註

- 1) 竹林・斎藤 (1998: 115-117) では、/r/ は「半母音 (semivowel)」として記述されている。
- 2) ノールズ (1999: 36-37) は「前進するアングロ・サクソン人によって、ブリテンの住民がひとまとめにウェールズとコーンウォールのとりでに追放されたという変わらぬ神話がある。... しかし住民を追放するには鉄器時代には入手不可能なレベルのテクノロジーが必要である。人々をその村から追放し、周辺の森や荒地から追い立てるには統合された軍隊が必要である。亡命者をすべて同じ方向に移動させるには道路と鉄道のネットワークを持った交通組織が必要である。こういったものは1940年代のドイツ軍や1990年代のセルビア軍によって組織することはできるが、ローマン・ブリテン以後のアングロ・サクソンの定住者にはできなかつた」と指摘するが、これは正鵠を射ている。
また、ドイツ語で「ドイツの」を表す形容詞 *deutsch* は、英語で「オランダの」を表す形容詞 *Dutch* と同語源なのである。
- 3) この /s/ 革新説は、例えば、ラテン語の「ケントゥム (*centum*)」が /k/ を持っているのに対して、その末裔であるフランス語での発音は「サン (*cent*)」と /s/ 音化している点からも窺えよう。同様に、イタリア語では「チェント (*cento*)」の /tʃ/ 音、スペイン語では「シエント (*ciento*)」の /θ/ 音というぐあいに、いずれも少なくとも /k/ 音からの逸脱が観察できる。
- 4) 厳密に言えば、このゲルマン子音推移を初めて組織的に提唱したのは、デンマークのラスク (*Rasmus Christian Rask* [1787-1832]) であり、それは1818年のことであった (大塚・中島, 1982: 489)。
- 5) この *tene* はアングリア方言であり、OE の書き言葉標準語であるウエスト・サクソン方言では *tien/tyn* である。
- 6) *Robinson* (1992: 10) や高橋 (1994: 32) では、1875年とある。
- 7) イングランド北部やローランドの北部では、現在でも /ð/ ではなく、/d/ で発音する方言があるらしい (*OED*, s.v. *father*)。father における、/d/ から /ð/ 音への転換は英語内での類推変化によるものだが、ある種の「先祖返り」と言えるだろう。
- 8) しかし、*Voyles* (1992: 95) は、東ゲルマン語のゴート語にも、ある特別な環境では、一種の「r音転換」が起こるとし、以下のような規則を提案している。

i) $z \rightarrow r / ___ \#\# r$

(where $\#\#$ = a word or prefix boundary and the rule applies optionally over a word boundary)

ii) 不定詞: /uz##risan/ 'arise' → *urrisan*, 句: /uz##rik*iza/ 'out of darkness' → *urriqiza*

これは、同化 (assimilation) の一例として処理すべきものであろうが、このような同化が起こるということは、とりもなおさず、/z/ から /r/ への移行の容易さを示している。

また、我々がよく知るウムラウトはドイツ語のそれだが、実は英語でもウムラウト現象は珍しくない。foot--feet や mouse--mice などに見られる複数形の作り方は、まさにこのウムラウトを利用したものである。

- 9) *Kufner* (1972: 82) が引用する *Schwarz* (1956: 39) は、「北ゲルマン」の中に、スカンジナビア人といわゆる東ゲルマンとされるゴート人・ヴァンダル人を分類しているが、これはゴート人発祥の地がスカンジナビア・南部スウェーデンのゴトランド (イェタラント) であるという伝承に基づくものである。松倉 (1994: 18-19) は次のように言う。「ありていにいえば、食えなくなって故郷をあとにしたのである。... 武装難民といったほうが事実に近いだろう。... バルト海は荒海ではない。ゴート族は既に前々からその航海になじんでいたと思える。大陸部ビスワ (ドイツ名ヴァイクセル) 河口までの距離はせいぜい二百キロメートル。大冒険というほどではない」
[*Ernst Schwarz, Germanisches Stammeskunde, Heidelberg: Winter, 1956.*]
- 10) *Theo Vennemann*, "Hochgermanisch und Niedergermanisch: Die Verzweigungstheorie der germanisch-deutschen Lautverschiebungen," *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, 106, pp.1-

- 45, 1984. Robinson (1992: 262) の引用による。
- 11) 批判のスタンスは違うが、本多 (2000: 25) は「英語」という呼び方に異を唱えて次のように言う。「日本語で外国語を言い表すとき、アングル語と言わずに『英語』式略語を使う例は、ほかにないのではありませんか。... これは『英語』に一種特別な地位を感覚的に与えていることになり、あたかも『高級な』言語であるかのように錯覚させます。『英語』などは他のさまざまな民族語と対等・平等なひとつにすぎません。これが特に論理的なわけでも倫理的でもない。そのことを常に忘れぬために、私はアングル語と表現しているのです」
- 本多氏が英語を「アングル語」と呼ぶことは、英語の「実体」に即していると言えるし、このように PDE をアングル語と呼ぶのなら、さしずめ、OE は「ウェスト・サクソン語」または「ウェセックス語」とでもすべきであろう。
- さらに、我々が英語を一種「高級な」言語であるかのように捉えていることの証左が日本における「英語公用語化論」に現れている。次の田中 (2000: 46) を警句として受け止めるべきであろう。「英語という外国語をわざわざ国内むけの公用語として課する考え方には、日本の指導層の、貧しい教養と、せまい世界認識が反映されている。国内に英語の話される地域を一つとして持たない日本のような国が、近隣諸国の言語への興味や関心を封じるかのように、すすんで国民のすべてに、日常はかかわりのない英語を課するという発想は、最も国際的ではなく、偏狭な文化観と無教養を露呈したものとして、国際的な軽蔑の対象となるであろう以前に、深く恥ずべきである」
- 12) この bird という単語も、実は OE では, brid(d) であった。つまり, r-metathesis を起こしたのである。
- 13) 有名なチェコの作曲家である Antonín Dvořák の名にこの音が現れる。日本語では、「ドボルザーク」という風に「ルザ」としているが、これはカタカナで表現する際の苦肉の策と言うべきで、実際には、「ドボリャーク」と「ドボジャーク」の間の発音になると思われる。英語においても /dɒvɔːrʒɑːk/ となり、日本語の場合と変わらない音転写になっている。
- 14) Moulton (1972: 148) は, “Note that word-final /R/ was not devoiced to /s/. This indicates that, unlike Go. [= Gothic] /z/, Ru. [= Runic Norse] /R/ was at that time of devoicing no longer the voiced counterpart of /s/.” と述べており, 「無声化」と r 音転換の関わりを指摘している。
- 15) ON の「a- 語幹男性名詞単数主格」には, 例えば, himinn ‘heaven’ のように -r を持たないものがあるが, これは, *himinR の -nR が同化を起こした結果である (Gordon & Taylor, 1952²: 283)。
- 16) 語中では, 西ゲルマン諸語でも r 音転換が保持されているし (上例 (10a) 参照), 語末でも, OHG に一部 -r を保持する単語があることなどから, Nielsen (1989: 10) は r 音転換が起きる前に *-az は脱落したと考えているが, 語末における屈折語尾の消長を考えたとき, その OHG の例はあくまでも特殊な例と見ることも可能である。なぜならば, OHG 以外では例証されていないからである。また, Nielsen (1989: 94) が引用する Makaev (1965) では, 西ゲルマン諸語でも -aR という語尾が消失する前に存在したのではないかという主張がなされている点も傾聴に値する。
[E.A. Makaev, *Jazyk drevnejšix runičeskix nadpisej*, Moscow, 1965.]
- 17) 女性名詞に関しても, -r 語尾は頻用されていると言える。
- | | | |
|---------------------|-----------------|---------------------|
| iii) o- 語幹女性名詞複数主格: | grafar ‘holes’ | grafar ‘of a hole’ |
| jo- 語幹女性名詞複数主格: | benjar ‘wounds’ | benjar ‘of a wound’ |
| wo- 語幹女性名詞複数主格: | orvar ‘arrows’ | orvar ‘of an arrow’ |
| i- 語幹女性名詞複数主格: | nauðir ‘harms’ | nauðar ‘of a harm’ |
| 子音語幹女性名詞複数主格: | bækr ‘books’ | bókar ‘of a book’ |
- 18) 現代標準ドイツ語の直説法過去単数 1・3 人称形は war であり, -s > -r の変化が見られるが, これは, 1350 年から 1650 年頃にかけての「初期新高ドイツ語」期に起こった変化であるらしい (工藤・藤代, 1992: 96)。
- 19) PDE にしても, 現代標準ドイツ語にしても, 接頭辞 be- で始まる単語は数多く見られるが, これは, ‘at, near, & by’ などを表す前置詞から発達したものらしい。OE bēon が ‘become’ や ‘happen’ をも表し得たことから判断すると, 単なる「存在」以外のニュアンスも持っていたことは確かであろう。であれば, 西ゲルマン諸語で「他動性」を与える接頭辞 be- が多用されることと bēon の新規導入は多少の平衡性があったのかも知れない。
- 20) ユート人の原郷については, ユトランド半島説とオランダのベルギーとの国境付近説 (Graddol et al., 1996: 43) がある。ケント方言と OFri. の類似性が指摘されていることから, OFri. の原郷であるオランダ北部・フリースラント諸島の付近であることは間違いないであろう。さらには, OFri. の「a- 語幹男性名詞複数主格」形が (すべてではないにしても) -ar 語尾であるという, ON に特徴的な側面を持

- つ点は、スカンジナビア半島からユトランド半島やオランダの北部地域にかけての言語に、何らかの共通性があったことを示唆しまいか。
- 21) 実は、ONの3人称複数現在形の語尾は、-um (e.g. erum 'are') であり、そこにr音はない。とすれば、(16)の-es語尾はONからの直接の影響によるものではないように見受けられる。よって、むしろこれは、3人称単数現在形での「-th対-s」という図式が、複数語尾にまで拡大されたと見るべきであろう。ONの複数語尾に対するというより、OEの複数語尾に反応した結果ではなかろうか。
- 22) A. Hill, "Early Loss of [r] Before Dentals," *PMLA*, 55, pp. 308-321, 1940.
H. Wyld, *A History of Modern Colloquial English*, Oxford: Basil Blackwell, 1920.
O. Jespersen, *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part I, *Sounds and Spellings*, London: George Allen & Unwin, 1954.
E. Stephenson, "The Beginning of the Loss of Postvocalic /r/ in North Carolina," in D. Shores & C. Hines, *Papers in Language Variation*, Alabama: Univ. of Alabama Press, 1977.
- 23) W. Labov, *The Social Stratification of English in New York City*, Washington, DC: Center for Applied Linguistics, 1966. Downes (1998²: 163-164)の引用による。

参考文献

- Bammesberger, Alfred. 1992. "The Place of English in Germanic and Indo-European." In Hogg ed., 26-66.
- Briggs, Asa. 1999. *A Social History of England*. 3rd edition. Harmondsworth: Penguin.
- Chambers, J.K. & Peter Trudgill. 1998. *Dialectology*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 千種真一. 1997. 『ゴート語辞典』 東京: 大学書林.
- Comrie, Bernard. ed. 1989. *The World's Major Languages*. Revised edition. London: Routledge.
- Downs, Williams. 1998. *Language and Society*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Gillmeister, Heiner. 1993. *Service: Kleine Geschichte der englischen Sprache*. Bonn: Fred Dümmers Verlag. (=ギルマイスター, ハイナー. 小野茂訳. 『英語史の基礎知識』 東京: 開文社, 2000年.)
- Gordon, E.V. & A.R. Taylor. 1957. *An Introduction to Old Norse*. 2nd and revised edition. Oxford: Clarendon Press.
- Graddol, David, Dick Leith, & Joan Swann. 1996. *English: History, Diversity, and Change*. London: Routledge.
- Hogg, Richard M. 1992a. *A Grammar of Old English*. Vol. 1. *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Hogg, Richard M. ed. 1992. *The Cambridge History of the English Language*. Vol. 1. *The Beginnings to 1066*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hogg, Richard M. 1992b. "(Old English) Phonology and Morphology." In Hogg ed., 67-167.
- 本多勝一. 2000. 「『英語』が日本を滅ぼす」『英語教育』, 49, 2, 24-25.
- Hughes, Geoffrey. 2000. *A History of English Words*. Oxford: Blackwell.
- Jones, Charles. 1989. *A History of English Phonology*. London: Longman.
- Knowles, Gerry. 1997. *A Cultural History of the English Language*. London: Arnold. (=ノールズ, ジェリー. 小野茂・小野恭子訳. 『文化史的に見た英語史』 東京: 開文社, 1999年.)
- 近藤健二・藤原保明. 1993. 『古英語の初歩』 東京: 英潮社.
- 工藤康弘・藤代幸一. 1992. 『初期新高ドイツ語』 東京: 大学書林.
- Kufner, Herbert L. 1972. "The Grouping and Separation of the Germanic Languages." In van Coetsem & Kufner eds., 71-97.
- Lass, Roger. 1994. *Old English: A Historical Linguistic Companion*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 松瀬憲司. 2000. 「言語接触と言語変容—古英語・古ノルド語間の接触について—」『熊本大学英語英文学』, 43, 41-55.
- 松谷健二. 1994. 『東ゴート興亡史—東西ローマのはざまにて—』 東京: 白水社.
- Moulton, William G. 1972. "The Proto-Germanic Non-Syllables (Consonants)." In van Coetsem & Kufner eds., 141-173.
- Nielsen, Hans Frede. 1989. *The Germanic Languages: Origins and Early Dialectal Interrelations*. Tuscaloosa: The Univ. of Alabama Press.

- 大塚高信・中島文雄 監修. 1982. 『新英語学辞典』 東京：研究社.
- 岡田令子 他. 1984. 『現代デンマーク語入門』 東京：大学書林.
- Roach, Peter. 1991. *English Phonetics and Phonology : A Practical Course*. 2nd edition. Cambridge : Cambridge Univ. Press. (=ローチ, ピーター. 島岡丘・三浦弘訳. 『英語音声学・音韻論』 東京：大修館, 1996年.)
- Robinson, Orrin W. 1992. *Old English and Its Closest Relatives : A Survey of the Earliest Germanic Languages*. Stanford : Stanford Univ. Press.
- Schildt, Joachim. 1991. *Kurze Geschichte der deutschen Sprache*. Berlin : Volk und Wissen Verlag. (=シルト, ヨアヒム. 橘好碩訳. 『ドイツ語の歴史』 東京：大修館, 1999年.)
- Short, David. 1989. "Czech and Slovak." In Comrie ed., 367-390.
- 高橋輝和. 1984. 『ゴート語入門』 東京：クロノス.
- 高橋輝和. 1994. 『古期ドイツ語文法』 東京：大学書林.
- 竹林滋・斎藤弘子. 1998. 『英語音声学入門』 東京：大修館.
- 田中克彦. 2000. 「公用語とは何か」 『言語』, 29, 8, 40-46.
- Trudgill, Peter. 1999. *The Dialects of England*. 2nd edition. Oxford : Blackwell.
- van Coetsem, Frans & Herbert L. Kufner. eds. 1972. *Toward a Grammar of Proto-Germanic*. Tübingen : Max Niemeyer Verlag.
- Voyles, Joseph B. 1992. *Early Germanic Grammar : Pre-, Proto-, and Post-Germanic Languages*. San Diego : Academic Press.